

禪の友

Zen no Tomo

2

February 2020

特集 涅槃会





ご本山だより

大本山永平寺

【新到上山】
しんとうじょうざん

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二



立春とは名ばかりで、石畳で裸足にサンダルの修行僧の指先は赤くなり、かかととはひび割れています。深々と積もりゆく牡丹雪は、時の過ぎる速さと恐ろしさを知らせてくれます。

永平寺では、毎年二月に入りますと、多くの雲水が修行に参ります。上山前には、近くの地藏院に宿泊し、上山の為の指南を受けます。翌朝、雲水は薄暗い中を、草鞋の紐をグツと引き締め、網代傘を深く被り、山門まで続く参道を一步一步進んでゆきます。

これからどんな修行生活が待っているのだろうか。高鳴る鼓動を落ち着かせ、期待と不安を抱きながら山門前に立ちます。立ち並ぶ雲水は、山門で白い息を吐きながら古参和尚と問答を交わし、入門を請います。

さて、永平寺をお開きになられました道元禅師さまは、次のような御歌を詠まれております。

「いひ捨てし その言の葉の外なれ

ば 筆にも跡を とどめざりけり」
言葉や文字は、思いや物事を伝えるのにとっても大切なものです。しかしながら、本当のことはそれだけではもちろん言い現わせないものです。

仏道修行も等しく、お経の文句や仏教の法律を学ぶことはもちろん大事だけれども、実際に行じ、おさとりが現れる処は、私たちの手の舞う処足の置く処に他なりません。何処においても、私たちは、起きたら食事を取り用をたし、寝る。これしかありません。過ぎゆく日常の中で、命を育む食事や寝起きをおろそかにしてはいないでしょうか。

永平寺の修行は、寝起きや食事、挨拶や言葉遣いといった当たり前のことを安らかにに行ずることそのものです。

晩冬の境内に響く新到上山を知らせる木版の声は、私たちの背筋を伸ばし、初心を奮わせてくれます。

よし！ 今日清々しく生きるぞ！



ご本山だより

大本山總持寺

【節分追儺式と涅槃会】
せつぶんついなしき ねはんえ

大本山總持寺 ☎〇四五・五八一・六〇二一



寒の入りより連日鶴見の街に鈴の音を響かせ、読経しながら周っていた「寒行托鉢」が一月末で終わり、二月三日は一足早く春を呼び込む「節分追儺式」が行われます。

この日は、人数制限いっぱい約二〇〇〇人の参詣者が福をいただきに大祖堂へ集まり、有名人や年男年女が豆をまきます。

なお、總持寺ではその年の干支に限らず、ご希望の方はどなたでも年男年女として豆まきに参加できます。

最初に江川禅師さまが大導師で御祈祷法要が勤められます。その後、禅師さまの「福はくうち」の発声で一斉に豆がまかれ、たちまち堂内は賑やかな歓声と熱気に包まれます。

豆まきの後はお楽しみみの「福引き抽

選会」が行われ、それぞれの福をいただいて帰路につきます。

十五日はお釈迦さまのご命日「釈尊涅槃会」です。

この日、大きな涅槃図を掲げて色とりどりの涅槃団子をお供えし、江川禅師さまご親修で「涅槃会法要」が行われます。涅槃団子は仏舍利（お釈迦さまのご遺骨）を模したものとされます。

地域によっては、涅槃団子を頂戴すれば一年間無病息災で過ごせるともいわれ、お守りとして腰にぶら下げたり小袋に入れて持ち歩くこともあります。涅槃会にちなみ十二日から十四日まで「報恩摂心」が修行されます。十八日から三月末にかけては、新しい修行僧が道を求めて続々と上山してきます。

選・坊城俊樹

たましひの抜けて枯野となりにけり

埼玉県 小林茂之

評「枯野」という季題のそもその本意というものがある。草木すべてが、そして見えるところの山河までもが枯れてしまう。そのような灰色の世界を謂う。まさにこの句のように「魂が抜けた」ような景色なのである。

目力の未だ残りし捨案山子

青森県 中田瑞穂

評 前の句とは逆の様相である。捨てられゆく案山子は今なお鳥を追い払うべき目力を残している。いまだ魂が宿っているのである。これはどんな目の案山子だったのか、少なくとも「の」の字で書かれた目ではないだろう。

◆ 凍蝶のときに重たき日差しかな 大阪府 柏原才子

◆ 蛭蚓みみず鳴く寝た子を魚ひし日暮道 千葉県 甲斐 勇

◆ 大鱧の顎に荒縄男鹿漁港 秋田県 小田篤恭葉

◆ 境界は茶の花白き垣根かな 山口県 御江恭子

◆ 反古積みて机上を照らす夜半の月 鳥取県 眞山博充

◆ お洒落してゆくあてもなき冬帽子 北海道 大野節子

◆ 桃するいのちの滴手に受けて 愛媛県 井上征郎

◆ だるまさん睨み返して達磨の忌 愛知県 松井暁見

◆ 空高しくラクシヨンまで吸ひ込まれ 奈良県 鈴木重雄

◆ 一輪のもの言ひたげな返り花 埼玉県 橋本永子

選者吟

狼の夢の中にも星流れ 俊樹

作句小見 これは「狼」を主題とした句である。冬の季節である狼は、冬眠をすることもなく短い夜を寝ているのだろうか。そして、きつと美しい山河を流れる星の夢を見ているに違いない。想像の句である。

選・長澤 ちづ

十の爪切りつつこころ澄み来たり生れて
十日の爪やはらかし

東京都 長谷川 睦

評 生まれたばかりの嬰兒の爪を、それはそれは大切に切る作者の様子が見える。雑念は一切はらわれ心は澄んでゆく。「十」の上の句、下の句の呼応がひびき合っている。

百三歳の母逝きませり水無月のまだ明け
やらぬしじまのなかに

埼玉県 丸山 劫外

評 長寿を全うされた母上を莊嚴する一首だが、子にとって母を亡くすという喪失感はいくら知れないものがある。寂しさを越えようとする抑えた心境が窺える。

◆ あちらこちら傷ある軽トラ何のその纏る葡萄哉せ初虫荷せり

長野県 南山 時子

◆ 入り陽燃え畔ゆくわれの老いし影二枚の刈り田に及びてながし

岩手県 穴戸 さとる

◆ 数えいる筈の歩数も忘れ去り照り葉明るき道選りてゆく

兵庫県 前田 あつ子

◆ 子の墓に供ふと妻の携へしわが育みし小菊香れり

広島県 徳永 進一郎

◆ ゆつくりと暗き境内歩みゆき水子地藏に上ぐる御明かし

新潟県 今成 愛子

◆ 草叢に屍となりし螻蛄の枯れ色秋の薄日にひかる

鳥取県 眞山 博充

◆ 外孫ら来て作りたる雪だるま昨夜の雪に育ちてみたり

秋田県 小田 篤恭葉

◆ たのもしく巨体震はせコンバインすつきり晴れの稲刈り日和

岐阜県 後藤 進

◆ 吾が友はひ孫の姿語るとき幼になりぬ冬の陽だまり

福島県 佐藤 忠

◆ 時刻の鐘コンピュータが撞く寺の葬儀は僧の通ひ来るらし

静岡県 杉原 民子

選者詠

砂の崖あらわに削りし風の牙 白波けさは囁くごとし

ちづ

作歌小見

昨秋は広域に台風被害が及びましたが、長野県の南山さんは見事な葡萄を収穫する力強い歌でほっとしました。被災された地域の皆さまには心からお見舞い申し上げます。偶然のことですが特選一首に並ぶ命の輝きに厳肅な気持ちになりました。